高橋教授の

この人に会いたい

Vol.77

ゲスト

須崎彰子 氏

立教大学グローバル教育センター兼任講師
元国連開発計画シリア事務所副所長

イスラエルと、パレスチナ自治区ガザを実効支配するイスラム組織ハマスの軍事衝突が激化している。対立がさらにエスカレートし、戦闘が中東の他地域に拡大する事態も懸念される。立教大学の須崎彰子・グローバル教育センター兼任講師は、国連開発計画（UNDP）シリア事務所副所長などを歴任し、紛争地域で人道支援に携わってきた中東のエキスパートでもある。中東地域における対立構造を解くヒントや、紛争が絶えない国際社会への日本人の向き合い方などを論じ合った。

暴力と報復の連鎖を断ち切るため「共存におけるオプション」模索を

恩師の言葉で中東に目覚める大学時代にチュニジア留学

高橋　須崎さんは長年、国連機関職員として国際舞台で活躍し、特に中東での勤務経験が豊富です。私が通った金沢大学附属高校の同級生でもありますが、そもそも、中東に興味を抱くきっかけは何だったのですか。

須崎　高校の先生から「これからは資格、特技を身につけなさい。特殊言語が面白い」と教えられました。もともと、外国に興味がありましたが、オイルショック後だったこともあり、希少価値があるアラビア語を勉強しようと考えました。大学4年時には文部省の奨学金で1年間、チュニジアに留学しました。

高橋　卒業後は民間企業に就職しイラクに派遣されましたが、イラン・イラク戦争のさなかです。中東の紛争地に女性が長期勤務するのは極めて珍しかったでしょう。

須崎　イラクでは変電所建設プロジェクトに従事しました。1年半後に帰国し、国際法務を担当しましたが、「アラブにかかわりたい」という思いが強くなりました。若手職員を国連機関の現地事務所に派遣する外務省のジュニア・プロフェッショナル・オフィサー（JPO）制度に応募し、採用され退社。UNDPイラク事務所で2年間、JPO勤務したのですが、任期終了目前に湾岸危機に巻き込まれ、バグダッドに3週間足止めされました。

高橋　その後、中東担当国連工業開発機関（UNIDO）本部職員を辞め、レバノンの大学に留学したのはなぜですか。

須崎　レバノンは、17年にわたる内戦が終わったばかりでした。内戦の傷跡から国を立て直すには、皆の心が一つになる社会融和を学び、また、ビジネスを通じた復興支援を知りたいと、ベイルートにある大学のMBAコースに進学したのですが、入学して1週間後、イスラエルの空爆を受け、アパートが即、停電。大学時代に先輩から有事にはガラスが割れないよう窓にマットレスをあてるよう聞いたことを思い出し、「これが中東だ」と思いました。その翌日、同僚から「Welcome to Middle East」と声をかけられました（笑）。

高橋　そのような体験をしたら、「私、もう嫌だ」と思うのが普通の人の価値感です。

須崎　中東についてもっと知りたいと思いました。たとえば、日本で「いい人」といえば勤勉な人ですが、中東では気前のいい人です。レバノンでは貧富の差が激しく、華やかな生活をしている人がいる一方、地方には、レントゲンすらないクリニックもありました。住んで見ないとわからないことが実に多いのです。

「やられたらやり返す」歴史が育んだ価値観

高橋　UNDP職員に採用され、ミャンマーやソロモン諸島で勤務した後、念願かなって中東に戻りますね。アサド政権と反体制派の泥沼の内戦が続くシリアです。

須崎　シリアでは人道支援とともに紛争で崩壊したコミュニティを再構築するため、たとえば、不要になった本を持ち寄って図書室をつくったり、ラマダン明けのお祭りの準備にクリスチャンも参加する交流の機会をつくりました。紛争地では停戦イコール平和ではありません。再発防止のため、人々の対立を解消、軽減しなければなりません。対立関係にある人々が互いに信頼を醸成する必要があります。小さな交流を積み上げていき、お互いを知り合うことによって信頼の再構築につなげる支援をしました。

高橋　私も平凡な日々は好まずスリルは大好きですが、命はかけていません。何が須崎さんを紛争地に駆り立てるのですか。

須崎　危ないと思うことより、仕事をやらねばならないと考えました。現地に行ってみると、呼吸の仕方がわかるものです。宿舎は夜の空爆対象にならないと信じていました。ただ、迎撃の破片が飛ぶと命の危険があります。

高橋　私は学生時代、バックパッカーでインドを1カ月ほど旅したことがあります。彼らは現世で徳

撮影＝原恵美子

社会融和が再建への第一歩 ——須崎

須崎彰子

Akiko Suzaki

立教大学グローバル教育センター兼任講師

すざき・あきこ●1982年、東京外国語大学外国語学部アラビア語科卒業。同年、株式会社明電舎に入社。88年、JPOとしてUNDPイラク事務所、後にUNIDO職員としてウィーン本部勤務。レバニーズ・アメリカン大学留学を経て2002年、UNDPミャンマー事務所副所長。UNDPニューヨーク本部勤務を経て、南太平洋UNDPソロモン諸島事務所副代表。16～19年、UNDPシリア事務所副所長ののち退職。NPOジャパンプラットフォームシリア紛争関連地域専門家、社会科学・経営学修士

を積むと、マイレージのポイントがたまるように、来世でアップグレードできると信じていました。同様に、中東の人々の基本的な価値観がわかれば、行動原理の理解に役立つはずです。

須崎　イラクがクウェートに侵攻したときの話です。隣家のゴミの捨て方が気に入らなかったら、一度お茶に誘って「ゴミの出し方に気をつけて」とやんわり頼むべきではと下宿先のイラク人の大家さんに話しました。すると、大家さんは「お前は中東の歴史を知らない。隣家がそんなことをしたら殴ってもいいのだ」と言い返され、絶句したことがあります。シリアでも「原爆を落とされた日本はなぜ、アメリカに報復しなのか」と何度も聞かれました。

高橋　やられたら、やり返すのが正義であると……。このアラブの考え方を前提に考えないと、今回のガザの紛争を理解できないということですね。ところで須崎さんは、アメリカに報復しない理由を聞かれ、どのように答えたのですか。

須崎　「報復しなかったから復興できた」と答えました。その後、「日本は戦後、どうやって復興したのか」と必ず聞かれます。両親の世代が報復をせず懸命に働いた結果、私たちが恩恵を受けているわけですが、中東の人々は、日本の戦後の発展を復興のモデルケースととらえています。

避けられない日本への影響「頭の隅にポストイットを」

高橋　紛争地域は世界中にありますが、日本にいると、それを意識することがありません。日本人として知る必要があるなら、どのような知り方が望ましいと考えますか。

須崎　2011年3月、シリア紛争が始まりました。東日本大震災と同じ時期です。日本では復興庁を中心にインフラ整備が進められ、現在は災害体験を語り継ぐフェーズに入っています。それに対し、シリアでは紛争が続いており、生活はますます悪化しています。メディア取材が限られ、カバレッジのレベルが違う面はありますが、紛争地はシリアだけではありません。紛争以外にも、世界中で自然災害が頻繁に起きています。そうしたことを頭の片隅にピンで留めておく、ポストイット（付箋紙）を貼っておくことが重要です。

高橋　貼っている人と貼っていない人とでは、何か違いがありますか。

須崎　日本は世界唯一の国ではなく、国際社会の一員です。生きていくために必要な食料の多くは輸入品で占められ、エネルギーの大半を中東に依存しています。日本で生活していても世界とつながっており、海外の出来事によって世界の平和と安定が変わり、日本も大きな影響を受けることを知っておかなければなりません。

高橋　須崎さんのように、世界とつながっていることを実感している人は少ないでしょう。SNSが発達し、世界中の人々と身近に交流し、情報がオンタイムで飛び込んでくるようになりましたが、かえってリアル感がなくなった気がします。

日本が築いた中東とのパイプ対話による再発防止に期待

高橋　中東情勢が風雲急を告げています。ロシアのウクライナへの軍事進攻に続き、世界は「戦争の世紀」に逆戻りしていると言わざるを得ません。

須崎　暴力の応酬、報復の循環をどう断ち切るか——。私は、共存におけるオプションが何なのかを突きつめることが、イスラエルとパレスチナの問題の落としどころになると思います。勝ち負けではなく、次の世代に何を引き継ぎ、語ることができるのか——ということを考えています。かつてシリアを離任するとき、子を持つシリア人の女性スタッフが次々に私のところに来て、「この紛争を子どもにどう説明すればいいか、わからない」と言うんです。彼女たちは次世代に向け、「子どもたちにもっと良い未来を」と考えていたわけです。その言葉を耳にしたとき、憎悪ではなく、希望を引き継ぐことができるかもしれないと思いました。それも共存オプションの一つになります。

高橋　日本人、あるいは日本としてできることは何でしょうか。

須崎　日本は政府開発援助やJICA（国際協力機構）、NGO組織、国際機関を通じて、長く中東地域で顔の見える開発支援と人道支援を続けており、中東では皆、中立な日本の支援を知っています。イスラエル、アラブの双方と対話ができる日本が果たす役割は大きいのです。

高橋　日本は和平を仲介できる立場にあり、もっとコミットしていいということですね。

須崎　そうです。そもそも、中東で領土の線引きをしたのはヨーロッパの国々です。ヨーロッパから見た中東や極東という言葉ですが、日本から見ると、アラブは決して中東に位置していません。紛争の痛みを共有しながらその解決と再発防止に向け、日本と関係国間のいっそうの対話に期待します。

高橋　現地の考え方を理解し、日本の色眼鏡ではなく、現地の人々の思考に立って考えないと、国際紛争は理解できないことを今回の対談で痛感しました。

ありがとうございました。

現地の価値観を知る努力を ——高橋

高橋　泰

Tai Takahashi

国際医療福祉大学教授

たかはし・たい●1986年、金沢大学医学部卒業、東京大学病院第1第3第2内科・麻酔科で研修。92年、同大学医学部医学系大学院医学博士課程修了（医学博士）後、米国スタンフォード大学に留学。94年、ハーバード大学公衆衛生校に武見フェローとして留学。97年4月、国際医療福祉大学医療福祉学部医療経営管理学科教授。2016年9月より21年3月まで安倍内閣未来投資会議の構造改革徹底推進会合医療福祉部門副会長を務めた